
HYBRID RAINBOW

夕焼け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HYBRID RAINBOW

【Nコード】

N0478B

【作者名】

夕焼け

【あらすじ】

僕は本当に深く愛したいし、本当に深く愛されたい。それだけだ。

「ただいま」

「あらあなた、おかえりなさい、今日はどうだった？」

「うん、まあ、ここ最近じゃ悪くない売り上げだったよ」

「そう、よかったわ。最近は大分厳しくなってきたものね、あの子が誕生日を迎えるまでに学費、貯められるかしら？」

「そうだなあ、まあ、平日で今日ぐらい売れてくれれば、あるいは間に合うかも知れないなあ」

「あの子、とっても楽しみにしてるわ。
もし間に合わないようだったらラバディおじさんに幾らか貸して頂けないか頼んでみるわ」

「ラバディさんところにはいつもなんだかんだでお世話になってるからなあ、
あんまり迷惑はかけたくないんだけど、この際しょうがないか」

「ええ、だってあの子の誕生日に何かをしてあげられた事、今までただの一度も無かったもの。」

あの子は優しい子だから私達に不満を漏らすことはしないけれど、心の中ではいつだってもっと多くのことを望んでるはずよ。いくら物分りが良いと言ったって、まだ8歳だもの」

「分かってる。せめて僕たちみたいな暮らしをさせないためにも、学校には行かせてやらないとな。」

僕らがほとんど何も教えなくなつて、独学で勉強して字が読めるようになったんだ。

僕らの子供とは思えないほど、とても頭がいい。

学校に行けさえすれば、あの子ならきつといい暮らしを手に入れられるだろう。

僕ももつと頑張らなきゃな」

「あなたも無理しないでね、

あの子にとって今、本当に必要なのは学費より、教科書より、あなたなのよ。」

あまり危険な所での商売はなるべく控えてね」

「ああ、大丈夫、心配いらないさ。

きちんとその辺は気をつけてるからさ」

「そう。じゃあそろそろ夕飯にしましょう。

あなた、あの子をちょっと呼んできてくれない?」

「ああ」

こんこん

「入るよ、いいかい？」

「あ、パパ！お帰りなさい！」

「ああ、ただいま」

「ごめんなさい、本を読むのに夢中になって帰ってきたのに気づかなかったわ」

「いいんだよ、どうせまたお前は勉強してるだろうと思って、音を立てないようにして帰ってきたんだ。邪魔をしちゃ悪いと思ってね。今日は何の本を読んでるんだい？」

「東アジアについて書かれてる本。私達の国よりずっと東の方にあるJAPANっていう国ではさ、夜でも街が昼間みたいに明るくて、ボタンを押せばすぐに電気がついて、蛇口を回せば幾らでも水が出てくるんだよ！まるで魔法の国みたい！」

「ちょっとまって！
そんな本うちに無かったはずだけど、どこで手に入れたいんだい？」

「……………」

「またあそこに行ったのか！
あそこには近づいちゃいけないってあれほど言っただろう！？」

あそこはこと違ってとても危険なんだ！
またいつ爆弾が降ってくるかもしれないんだぞ！」

「ごめんなさい……………」

でも、どうしても本が欲しかったの。

とても普通の本屋さんでは高くて買えないし、あそこなら潰れた
お店にいっぱいあるから……………」

「本と自分の命どっちが大切なんだ！」

死んじやったらお前になりたいって言ってたお医者さんにもなれないんだぞ！

僕達とも二度と会えないんだぞ！？」

「でも！ もつともつと勉強しなきゃお医者さんになれない……………
ただ逃げ回って、苦しんでる人達を見殺しにするなんて嫌！

もうお兄ちゃんみたいな「お医者さんがいないせいで助けられなかった人、お医者さんさえいれば助かったはずの人」を出したくないの！

この街には今だってまだお医者さんがいない。
私になるって決めたの！！」

「……………お前の気持ちは分かってる。

でも、それでも心配なんだよ。

分かってくれよ。

頼むよ……………」

「……………ごめんなさい。

分かったわ。

もう、行かないから…………… パパ、ごめんなさい」

「学費がさ、もうすぐ貯まりそうなんだ。きつとお前の誕生日までにはなんとかなると思う。いや、どうにかしてみせる！」

だからもう二度とあそこには行かないって約束してくれるかい？」

「本当！？ 私学校に行けるの！？

分かったわ！あそこには行かないって約束する！！

ありがとうパパ！

大好き！」

「よしよし、じゃあご飯にしよう。

ママが夕食の準備を済ませてるはずさ」

この子の笑顔には本当に救われる。

これを守る為に僕は生きてるんだと言い切れる。

どんなに生活が苦しくても、この子の笑顔を見れさえすれば、生きている事を実感できるんだ。

僕は中東の貧しい国のはずれで生活をしている。

本当は妻や子供にはもう少し楽をさせてやりたいんだけどさ、

なんせ僕には学歴がないし、字も読めないからロクな仕事にはありつけない。

家族の事を考えれば、こんな街はすぐにでも出て行ったほうがいいんだろうけど、先立つものがないんだ。

僕達夫婦はきつとこの街で生まれ、この街の呪縛を断ち切れないままこの街で死んでいくんだ。

だからせめてこの子だけは学校に行かせてやりたいと思う。

この子は賢い子だから、きつとこの街を出てやっていけるだけの人間になるだろう。

がんばらなきゃな。

数日後。

「よし、今日は思ったより稼げたな。そろそろ引き上げるか。ここも大分危なくなってきたしな」

つと、その前にあそこに寄って行くか。

またあの子に自分で行かれるよりは僕が行ったほうがまだからな。

あつたあつた。

あの子、どんな本が好きなんだろうな。

僕は字が読めないからな。

まあ、とりあえず爆風でぼろぼろになってない奴と

絵柄が綺麗な奴を幾つか持って帰るか。

あの子喜ぶかな。

さて、早く帰ろう。

！！

あれは爆撃機！？

！？

うちの方角に向かってる！？

待ってくれ！

待ってくれ！

娘がいるんだ！

2週間後に入学が控えてるんだ！

楽しみにしてたんだ！

早く帰らなきゃ！

くそっ！

待ってくれ！

そっちには行かないでくれ！

そっちに爆弾を落とす理由はないだろ！！！！

娘がいるんだ！

.....

僕がそこについた時、

すでに僕の家は無残な瓦礫と化していた。

僕はその瓦礫を掘り起こす。

崩れた壁の破片を一つずつどかしていく。

娘がいるんだ。

入学なんだ、2週間後に。

とても楽しみにしてたんだ。

お医者さんになるんだって。

早く掘り起こさなきゃ。

きつと大丈夫さ。

あの子が死ぬはずない。

神様があんなに優しい子を見捨てるはずないさ。

大丈夫、

早く掘り起こすんだ。

きっともう避難してるかもしれないな。

ここに「彼女らはいなかった」事を証明する為に僕は今掘り起こしてるんだ。

大丈夫。

再来週入学式なんだ。

神様はきっと僕らの願いを聞き入れてくれる。

だってあんなに楽しみにしてたんだ。

大丈夫。

再来週に入学式なんだ。

だいじょうぶ。

だってとても優しい子だもの。

とても楽しみ西9手j rで:あs:::i「pg

手。

彼女の手。

娘の小さな手。

僕の最愛の手。

ああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ

日本。

僕は今日日本にいる。

空港。

そう、ある目的を抱えて。

僕はあの日全てを失った。

全てを失い自暴自棄になっていた僕に優しく手を差し伸べてくれた人がいた。

とても悲しい目をした人だった。

その人はいった。

「お前はとても大切なものを失ってしまったね。でもね、これで終わりじゃない。」

戦争は続く。

奴らはまだまだ爆弾を落とす。

誰かの大切な人が死ぬ。

お前に使命をやるう。

戦争を終わらせるんだ。

その為には幾つかしなければならぬ事がある。
そのうちの、とても重要な任務をお前に任せよう。
どうだ？やるか？」

「………… あの子の、あの子の敵が取れるならなんだってする！！
もうあの子みたいな子を出してはいけない！！！」

「そうか。」

お前ならそういうと思ったよ。

誰よりも優しいパパなものな。

まずこのチケットとビザで日本に行くんだ。

お前なら大丈夫。

ここの生まれにしては肌が白いし、彫りも深くない。
ばれずに奴らの国に入り込める。

何年か前にアメリカで起こったテロは知ってるな？
あれを日本でやるんだ」

「ちょっと待って！

アメリカじゃないのか？

爆弾を落としてるのはアメリカだろう？

なら戦争を終わらせるならアメリカにまたテロを起こすのが一番効率的じゃないか！」

「お前の言うとおり、爆弾を落としたのはアメリカだ。
お前の妻と娘を殺したのはアメリカだ。

俺たちはかつて俺たちなりの制裁をアメリカに加えた。
しかし、現状どうだ？

奴らは爆弾を降らせ続ける。

状況は改善されていない。

何故だと思っ？」

アメリカはアメリカだけの力で機能してるわけじゃないからだよ。ヨーロッパ諸国、そして日本。

アメリカの背後に群がる小判ザメどもさ。

奴らはアメリカから優遇を受ける代わりに、アメリカに相応の金を払ってるわけだ。

その金で爆弾が作られる。

そして俺たちの街が焼かれる。

アメリカを潰すには、アメリカの背後から潰す必要がある。分かるな？」

「し、しかし、日本は直接僕らの国に爆弾を落としてはいいし、自衛隊だってどちらかといえば街の復興の為にこの国に来てたんじやないのか？」

「本当にそう思うかい？」

確かに彼らはある意味ではこの街の復興に携わった。

しかし、それよりももっと大きな目的があるのさ。

奴らがアメリカからの要請でここに送られてきたのは知ってるな？つまり、アメリカにとってそれをする意義があつて、それを果たす為にここに来たわけだ。

アメリカがそもそも何故今になってここを狙ったのか。

油田さ。

奴らは都合のいい名目を並べ立てて、俺らから油田をかつさらうつもりなのさ。

しかし常任理事国のトップであるアメリカが、あからさまに我々から油田を奪えば、世界に対して面目が立たない。

キャプテンバッヂを汚さずに石油を手にする為には、この国がアメリカ好みの街へ発展し、この国の民がアメリカを崇拜する必要がある。

そうなれば、暴力に頼らずとも、この国の民は自ら石油をアメリカ

に差し出すさ。

それを促す為にアメリカは日本の自衛隊をここに寄越したのさ。

他国を自分達で爆破し、その復興を自分達で行う。

そして復興が終わる頃には日本やヨーロッパ諸国と同じアメリカに忠実な犬さ。

俺たちはそんな茶番染みた未来を阻止するために活動をしている。

そして事を成し遂げる為にはまずヨーロッパ、日本を叩いておく必要がある。

何より、行ってみれば分かる。

お前は俺が指図せずとも、奴らの街を破壊してしまいたいと考えるはずさ。

とにかくまず日本へ行くんだ。

いいな？」

そして僕は日本へ来た。

数人の仲間とともに。

彼らもあの戦争で家族や恋人を失っている。

銃を手にする理由がある。

僕達の目的はあのアメリカ同時多発テロと同じ。

日本の経済に最もダメージを与えられる場所に飛行機で突っ込む。
日本に来て1週間、もう準備は出来ている。

今日、それは実行される。

僕は最初この地に降り立った時、

この地の住人を虐殺する事に対して自然と否定的な感情が芽生えた。

娘の憧れた日本。

魔法の国。

でもここにいる彼らも僕らと同じように生活を送り、生きているのだ。

彼らの人生を奪う事で戦争が終わったとしても、それが本当に正しい選択なのか？

あの子の弔いになるのか？

でも僕はすぐに知ることになる。

その迷いが間違ったものだということを。

僕の息子が病に倒れ死に絶えた時、

彼らは自分の国の政策すら知らず、それが僕らの国にどんな影響を与えるのかも省みず暢気に、

水を使いたい放題使い、食べ物も食べたい放題食べて生活をしていたのだ。

僕の妻や娘に降った爆弾は、彼らが出した税金で作られたものだ。

日本やアメリカに住む彼らがやりたい事をする。

次から次へと湧き上がる欲を満たす為に彼らは消費を続ける。

そのシステムで生まれた金で爆弾が作られ、それが僕らの国に落とされる。

でも当の彼らは知らん振り。

いや、ふりじゃなくて、本当に知らないのかもしれないとすら、こ

の国の若者の顔を見ていたら思えてくる。

彼らの傲慢さに僕の家族は殺されたんだ。

死ななくてもよかったはずだ。

彼らが「自分達が今何をしているのか、自分達の国が今何をしているのか」を知り、道を正す努力さえ怠らなければ僕の子供達は、妻は死なずに済んだかもしれないのだ。

「パパ、ありがとう！大好き！」

娘の笑顔を思い出す。

間近に迫った入学式をとてもしみにしてた。

8歳にしては少し大人びていたけれど、学校に行けることを教えてやると、とても無邪気にはしゃいで喜んでた。

あの日だって僕が持ち帰った本を手にして、その無邪気な笑顔を見せてくれるはずだった。

本当に、本当に優しい子だった。

なぜ娘は死ななければいけなかったのか。

僕には分からない。

アメリカが悪いのか、アメリカに加担したヨーロッパや日本が悪いのか。

僕には分からない。

でも、許せないんだ。

あの笑顔を奪っておいで、僕らのささやかな幸せを奪っておいで、

奪った事も知らず幸せそうにのうのうと生きてる奴らが。

もしこの国の人たちに責任が一つもないなら、この怒りを日本に向けるのは見当違いかもしれない。

しかしあの日、あの男が言ったように、僕らの街に爆弾が落とされたことの責任はこの国の連中にもあるんだ。知らしめなければならない。

もうあの子のような犠牲者を出さない為に。

こんな馬鹿げた戦争を終わらせるんだ。

僕の命をもって。

僕は仲間とジャンボジェットに乗り込む。

座席の位置は最前列。

すぐに飛行機の操舵を掌握するためだ。

機内アナウンスが流れ、

飛行機がうなりをあげて飛び立つ。

飛行機がある程度の高度に達した時点で僕の仲間が合図を発する。僕らはあらかじめ特別なルートで持ち込んだ武器を手にして立ち上がる。

さあ、全てを終わらせよう。
あの子の為に。

そして銃声は鳴り響く。

一時の熱が冷めて報道はあまりされなくなったけれど、未だに世界のあちこちで紛争やテロが起こっている。
被害者方にとってはもちろんたまったもんじゃないだろう。

でもね、ただ「あれは悲しい事件だった」「被害者が可哀想」って言うてるだけじゃ、また同じテロが起きちゃうよ。
次の標的はアメリカじゃないかもしれないしヨーロッパでもないかもしれない。

日本に対して行われたってなんら不思議はないんだ。

もし彼らがテロを起こしてあなたの家族が巻き添えを食らって死んだら、
だら、

あなたの恋人が、大切な友人が巻き添えを食らって死んだらあなたは彼らを酷く憎むだろう。

殺したいくらい憎むだろう。

でも、それと同等の憎しみを持って彼らが銃を手にしてる事を忘れないといけない。

自分達の国が何を行っているのか、どういう風に世界と関わっているのか知ろうとしない事は立派な犯罪だ。

家族を殺されたって、大事な友達を殺されたって、恋人を殺されたって文句をいえないんだよ。

僕は愛する人たちを奪われたくないから学んでる。
誰かの愛する人を奪いたくないから学んでる。

今一度問う。

君らの言う愛は本当の愛？

自尊心や物欲としての愛じゃない本物の愛？

本当に誰かを愛する事を知っているなら、なぜそんなに「誰かの愛する人」を奪う事に無頓着でいられるんだろう？

本当に誰かを愛する事を知っているなら、なぜそんなに自分の事はっきりになれるんだろう？

本当に誰かを愛する事を知っているなら、なぜそんなに自分の欲ばかりを優先できるんだろう？

僕には不思議でならない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0478b/>

HYBRID RAINBOW

2010年10月13日03時41分発行